

# いのちを消費する者の責任を考える

資料4  
細川委員提出

## ～アニマル・ウェルフェアとエシカル消費～

日本女子大学教授 細川幸一

### 1. 問題意識

スーパーで並べられている牛、豚、鳥などのきれいにカットされ、パックされた食肉を見て多くの消費者が美味しそうと思うであろう。当たり前のことであるが、食肉は生き物を屠殺して製造されたものであり、前段階には家畜を飼育する畜産が存在する。しかし、消費者は食肉や加工食品が数日前までには生きていた動物であったことを忘れてしまいがちで、畜産の実態への関心は低い。

中国の食品加工メーカーが使用期限切れの食用肉を使ってつくった加工食品が日本でもファストフード店などで販売されていたことが明らかになり、食の安全への不安が増している。問題の背景には、消費者が安い食肉を求めあまり、生産者がコストを引き下げするために工業化を進め、設備費や人件費を極限まで減らし、効率最優先で生産を行っていることにある。

食肉加工業と同様に、コスト削減のための効率が生き物を扱う畜産でも追求され、多くの家畜は大量生産のための「畜産工場」とも言える閉所で飼育されているのが実態である。家畜は単なる産業動物（経済動物）として扱われ、動物らしい行動を抑制されて苦痛に満ち、かつ短い一生を送ることになる。

消費者の権利に加え、消費者の責任が議論されている。豊かで便利な社会の裏側で犠牲になっているものに我々消費者は無関心すぎるように思う。食べ放題の焼肉や、しゃぶしゃぶが盛況だが、それは、いのちの食べ放題、すなわち、いのちを好きなだけ殺しますということである。いのちを消費する者の責任として、こうした実態を見つめ、自らの消費行動を検証することもエシカル消費を考える上で重要な地位を占めるものと確信する。根源的にはなぜ人間は動物を殺してよいのか、あるいは、いけないのかという哲学的な議論になるが、ここではそれには立ち入らない。

### 2. アニマル・ウェルフェア (Animal Welfare) について

一般的に人間が動物に対して与える痛みやストレスといった苦痛を最小限に抑えるなどの活動により動物の厚生を実現する考え。多くの動物は人間の利益のために動物本来の特性や行動・寿命などが大きく制限されていることが多い。こうした利用を認めつつも、動物の感じる苦痛の回避・除去などに極力配慮しようとする考えがアニマル・ウェルフェアである。その点で動物愛護と異なる。日本語では、「動物福祉」や「家畜福祉」と訳される場合があるが、「福祉」という言葉が社会保障を指す言葉としても使用されていることから、農水省は、誤解を招くおそれがあるとして、家畜（産業動物）においては、「アニマル・ウェルフェア」を「快適性に配慮した家畜の飼養管理」と定義している。

**●対象範囲**

## • 愛玩動物

飼育者による動物の不完全な飼養により、飼育動物を無計画に繁殖させ、ときに劣悪な飼育環境を発生させる事例が問題となる。

## • 実験動物

生命科学試験では動物を使用しない方法に置き換え（Replacement）、利用する動物の数を減らし（Reduction）、動物に与える苦痛を少なくする（Refinement）という3Rの原則が促進されている。

## • 展示動物

基本的に動物が寿命を全うする最期まで飼育し続けること（終生飼育）が大原則。また、動物園や水族館などの公の飼育施設では、動物の本性に配慮し、飼育や展示方法を見直す動きが活発化している。

## • 野生動物

外来種を駆除する場合には可能な限り苦痛を与えない方法で安楽死させること。

## • 畜産動物

本概念は畜産業に多大な影響を与えており、欧米を中心に活動や研究が盛んである。正常な行動が発現できない狭い囲いのなかで飼育することを避け、屠殺においては極力苦しませない方法が実行される。毛皮利用においては、毛皮動物の飼育、生きたまま剥がすなどの屠畜方法の酷さ、精巧なフェイクファーの登場などから事業者、消費者ともに控える傾向にある。

以下、畜産動物についてふれる。

**●目標**

畜産動物については、1922年に英国の畜産動物ウェルフェア専門委員会が提案した「5つの自由」が国際的に認知されている。

- 飢えおよび渇きからの自由（給餌・給水の確保）
- 不快からの自由（適切な飼育環境の供給）
- 苦痛、損傷、疾病からの自由（予防・診断・治療の適用）
- 正常な行動発現の自由（適切な空間、刺激、仲間の存在）
- 恐怖および苦悩からの自由（適切な取扱い）

**●日本での動き**

2002年に「農業と動物福祉の研究会」（JFAWI）<sup>1</sup>が発足。OIE（国際獣疫事務局）<sup>2</sup>に参加する国際的NGOとしてICFAW（国際農業動物福祉連合）<sup>3</sup>が結成されることとなり、これに参加する日本のNGOとして発足。

畜産技術協会等が農水省の委託事業として2011年に「アニマル・ウェルフェアの考え方に対応した飼養管理指針」を6種の動物で策定。畜産技術協会による乳用牛、肉用牛、豚、採卵鶏（レイヤー）、ブロイラー、日本馬事協会による馬の指針がある。

<sup>1</sup> Japan Farm Animal Welfare Initiative

<sup>2</sup> Office International des Epizooties. 2003年より通称としてWorld Organization for Animal Health（世界動物保健機関）も使われている。

<sup>3</sup> International Coalition for Farm Animal Welfare.

なお2004年以降、OIEで採択されたアニマル・ウェルフェアに関する基準は全部で15あるが、日本国内においてこれらの基準は周知されておらず、正式な翻訳も存在しない。

### 3. 日本で動物愛護団体が問題にしている主な事例

- ・豚の妊娠ストールによる飼育（繁殖用母豚の拘束飼育）。



- ・採卵鶏のバタリーケージ飼育（22センチ×22センチ程度の空間。床が網のため、爪が伸び切り、からまる。また卵が転がるように傾斜している）。



- ・アンゴラウールの採集問題（CBSにより中国での採取方法が報道され、複数のアパレルメーカーが取り扱いを中止）



- ダウンの採集問題（生きた鳥からダウンをむしる方法が問題となっている。また、フォアグラ等のために強制給餌された鳥から採取されることがある）



- 化粧品の動物実験（例：ウサギの目を利用したシャンプーなどの目刺激性試験）



- 麻酔なしでの豚の歯の切除、尾の切断、去勢。
- 麻酔なしの鶏のデビーク（くちばしの切除）、強制換羽（卵を産む能力が衰えた雌鶏に10日～2週間、餌を与えず強制的に羽を抜けかわらせて、再び卵をたくさん産めるようにすること）
- 採卵鶏（レイヤー）のオスのひよこの殺処分（孵化すると、当然、ヒヨコの半分はオスである。しかし、オスは卵を産まないため「不良品」として、生まれてすぐにすりつぶされる。逆にフォアグラは孵化したアヒルのオスしか使わないので、メスはすぐに殺される）。
- フォアグラの強制給餌（フォアグラは無理やりアヒルに餌を与え、肥大させた肝臓）
- 家畜の飼育場を出てから屠殺までの給水問題（搬送時間が長い場合、また屠殺場に運ばれてから屠殺まで時間がある場合、家畜は渴きに苦しむが、給水されない問題）

#### 4. アニマル・ウェルフェアとエシカル消費

人間はどのようにして自らが欲するモノを手に入れてきたか。原始的にもそして現在においても略奪という手段がある。人類の歴史は紛争・戦争の歴史と言ってもおかしくないが、領土、エネルギー、食糧などの略奪が原因であることも多くあった。また、人間までも労働力として略奪してきた。奴隷である。

地球レベルではこうした紛争や戦争による略奪は未だに起こっているが、そうした状況で生きていくことは逆に自分たちが他者から攻撃され、略奪される可能性がある。そこで、人類は平和な手段でほしいものを手に入れることも学んだ。生産である。自給自足の生活だった人類の先人たちは他の動物と違って、いろいろな道具を発明してきた。原始時代には、動物を捕まえたり、魚をわしづかみしたりして食べ物を得ていたが、人間は狩猟や漁猟にふさわしい道具を生み出し、その効率を高めていった。天然の動物や植物には限りがあるので、畜産や農作、養殖の術も習得し、さらに生産性を高めていった。現在の消費生活の豊かさには生産性の向上が大きく寄与している。

しかし、平和的手段とされる生産の内部には略奪が潜んでいる。平和学に消極的平和と積極的平和という二つの概念がある（現在の安保法制問題で議論となっている積極的平和主義論議とは異なる）。争いがない状態を消極的平和、たとえ争いはない状況にあるとしても構造的暴力（貧困、抑圧、差別など）が存在する状況は真の平和ではないとして、それをもない状態を積極的平和という。平和な手段とされる生産においても労働者の搾取、環境破壊等などが問題となっているのは周知のとおりであり、それらがエシカル消費の重大な関心事であることに疑いはない。

産業動物は人間の利益のために繁殖させられ、人間の利益が最大になるように飼育され、消費者向け商品として屠殺され、商品となる。動物を殺して食するのは、人間が生きるためには当然という主張が一般的である。だが、現在の効率最優先の工場畜産は動物の生き物としての尊厳を軽視し、単なる利益を生む出すモノとしてしか扱わない傾向がある。工場畜産を行わせているのは安い食肉等を求める消費者であり、私たちはスーパーの食肉が生きものであったときに彼らが人間からどのような扱いを受けてきたのかを知る必要がある。

人間＝食物連鎖の頂点と言われるが、人間は一方的に動物に対して「いのち」の略奪を続けており、世界中で人間の利益のために奪われている「いのち」の数は年間600億といわれる。倫理的消費調査研究会で、動物という、意識・感覚を持ち、地球上に人間とともに生きる存在がどのような扱いを人間から受けているのかの検証を行うことは当然と考える。最後に、環境問題（水・エネルギー消費、排泄物による汚染など）の視点から、人類は肉食を維持できないという指摘があることも付記しておく。

●豊かになってはじめて気づくことがある●



落ちた小動物・昆虫が這い出せるよう配慮されたU字溝の例  
商品名「ハイダセール」